『祝本狂言集』用語考

坂口　至

一

『祝本狂言集』（法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵、以下『祝本』と略記）は、近年永井猛氏によって紹介された新資料である（「観世」昭六一・六月号に概要の紹介と諸狂言台本中における位置付けの試み、「能楽研究」十二号〔昭六二・三〕に全文の翻字と解説がある）。

永井氏によれば、『祝本』は、成立年代・筆者ともに不明ながら、内容的には現存最古の『天正狂言本』（天正六年＝一五七八年の年記あり）と、大蔵流最古の『虎明本』（寛永十九年＝一六四二年成立）や和泉流最古の『天理本』（寛永～正保頃成立）との中間に位置付けられる台本と考えられるという。

また、永井氏は『祝本』の成立時期、この本の旧蔵者である祝氏のこと、さらに流派についても推定を加えられ、成立年代は近世最初期、慶長から寛永初年頃を想定され、祝氏については大阪在住の能楽関係者であったらしいこと、流派に関しては『虎明本』の形に固まる以前の大蔵流系統の狂言の様相を伝える台本の可能性がかなり強いことを述べておられる。

もし、これらの推定が正しければ、『祝本』は所収の本狂言がわずか二十三曲という小本ながら、現存最古の、詞章の整った京畿内成立の本（『天正狂言本』は筋書きと語り・歌謡が中心で、東北地方成立の可能性が大）ということになり、演劇史的な価値は言うまでもなく、国語史（中央語史）を考える上でも、きわめて貴重な資料となり得るのである。

しかし、言うまでもなく、それはあくまで推定であり、我々は、その推定を前提にして国語史上の価値を云々することについては、慎重の上にも慎重を期さなければならない。

むしろ、我々国語史家のまず取るべき態度は、『祝本』の詞章をことばの面から種々検討し、内容面からの推定に対して、それを支持できるか否かを具体的に示すことであろう。

筆者はかつて、このような認識から、『祝本』のことばについて、まず表記面の特徴を調査し、『虎明本』や『天理本』よ

り以前の表記の特徴が見られることから、近世最初期の成立（直接には書写）ではないかという永井猛氏の推定に賛意を表したことがある（文献①）。

このたびは、主に文法的な用語を中心に考察し、『虎明本』や『天理本』、さらに『狂言記（正篇）』（一六六〇年刊）との比較を通して、その特徴を明らかにしたいと思う。

本文には、法政大学能楽研究所から提供を受けた原本写真版を用い、随時「能楽研究」十二号所載の翻字を参照した。

二

これまでに、古狂言本の相互比較に用いられてきた文法事項には様々なものがあるが、ここでは紙幅の関係から、次の六項目を中心に考察する。

（一）二段活用とその一段化
（二）ラ行下二段活用とその四段化
（三）動詞・助動詞の命令形語尾「ヨ」と「イ」
（四）「御座アル」「御座ル」「オリャル」「オヂャル」とその否定形
（五）待遇表現形式「オ～ヤル」「～ヤル」
（六）原因・理由を表す「ホドニ」「ニヨッテ」など

（一）二段活用とその一段化

二段活用の一段化現象は、中世から近世にかけての国語変化の重要なものであり、研究も多い。狂言本に限っても、『虎明本』や『天理本』における研究（文献②）、『狂言記』における研究（文献③）などがある。これらによれば、『虎明本』や『天理本』においては、一段化は僅か（『虎明本』で二段活用対一段活用はほぼ二十五対一〔実数一千二百余対四十八〕、『天理本』で三十六対一〔実数七百八十四対二十七〕。いずれも延べ語数による比較で動詞のみ）であるが、『狂言記』においては双方拮抗している（二段対一段は一対一・二〔実数二十九対三十六〕、やはり動詞のみ）。これに対して、『祝本』では、一段化したものが、やはり動詞に限られるが、次のように五例見える（以下、会話文の用例のみを対象とし、翻字は「能楽研究」十二号のものに準ずる）。

＊此馬ハすハぶきすれバはねる（三オ）
＊いやいやそれがしがたべるものでハ御座ない（十八ウ）
＊いやそれがしがたべる事ハめいわくにて候（十八ウ）
＊なに事ニさやうニほゑるぞと申されう（二十三オ）
＊はらハたゝねどがうがにゑる（五十八ウ）

一方、二段活用のままの動詞は十例で、二段対一段は二対一の割合となっており、用例は多くないが、『祝本』は『狂言記』の様相に近いことが分かる。

（二）ラ行下二段活用とその四段化

敬語表現に用いられるラ行下二段活用の「メサルル」「クダサルル」「ナサルル」などは、近世初期ころから少しずつ四段化する傾向が見られる。特に、「メサルル」の四段化は他のものに先んじており、古狂言本でも『虎明本』や『狂言記』に見られることが報告されている（文献④）。『祝本』でも、

＊今度ハはしりとびにめされ（十一オ）

＊ようめサツたノ（二十二オ）

＊何めさるぞとおもたれバ（三十七オ）

の三例（連用形一、終止連体形一、命令形一）に四段化が見られ、下二段の六例（未然形一、連用形五）に対して、下二段対四段は二対一の割合となっている。文献④によれば、『虎明本』では、下二段対四段は十四対一（実数七十二対五）、『狂言記』では一対三（実数二対六）の割合となっており、『祝本』は、両本の中間に位置することが分かる。

なお、『祝本』には「クダサルル」が九例、「ナサルル」が三例見られるが、いずれも四段化は起きていない。この点は『虎明本』と同様で、「クダサルル」「ナサルル」双方に二例（いずれも命令形）の四段化が見られる『狂言記』とは異なっている。

（三）動詞・助動詞の命令形語尾「ヨ」と「イ」

上一・上二・下一・下二の各段およびカ変・サ変に活用する動詞、さらに下二段に活用する助動詞の命令形は、伝統的に語尾に「ヨ」を有していたが、口語としては中世ころから「イ」に変化し始め、近世において一般化したと言われる。この現象に関する研究はこれまでほとんど出されていないが、筆者はかつて古狂言本を資料とした調査をまとめたことがある（文献⑤）。『祝本』の実態についてもそこで簡単に触れておいたが、全体として旧形「ヨ」対新形「イ」は、ほぼ一対四（実数十二対四十五）で、『狂言記』の一対二十四（実数十三対三百十八）は言うに及ばず、『虎明本』の一対八（実数百五対八百八十二）、『天理本』の一対六（実数八十二対四百八十四）に比しても、新形の割合は低くなっている。つまり、この現象では、『祝本』は『虎明本』や『天理本』より古い様相を呈していることになる。特に、『虎明本』や『天理本』ではほとんど百％に近い比率で新形「イ」が用いられている助動詞の命令形の場合、『祝本』で二十三％強の旧形「ヨ」が出現していることが特徴である（実数「ヨ」六対「イ」二十）。次にその用例を挙げておく。

＊さらバとらしられよ（七オ）

＊なぎなた成共持せよ（二十四オ）

（四）「御座アル」「御座ル」「オリャル」「オヂャル」とその否定形

これらの用語は、古狂言本の待遇表現形式として頻繁に用いられたものであり、しかも台本の新旧によってその使用状況に明瞭な相違が現れるものとして、早くから注目されてきたもの

である。

まず、「御座アル」「御座ル」については、近世最初期の狂言本では、「御座ル」が多数を占める中で「御座アル」の用例も比較的多く見られるが、その後の狂言本では「御座アル」はほとんど用いられることがない。具体的には、『虎明本』では前者対後者が、ほぼ一対九（実数では三百対二千八百四十四）、『天理本』では一対七（実数百三十対九百十九、『抜書』を除く）となっている（文献⑥による）。また『狂言記』では、「御座ル」のみが用いられる（実数九百二十四、文献⑦による）。

これらに対して、『祝本』では「御座アル」は、

＊さやうニ御座あれバ、それがしハあまり無調法にて（四十三オ）

の一例のみで、他の百三十八例はすべて「御座ル」である。つまり、『祝本』は『狂言記』の様相に酷似していることになる。

ところが、「御座アル」「御座ル」の否定形である「御座ナイ」「御座ラヌ」の実態は、やや異なる。『虎明本』では、前者対後者が一対一（実数百七十六対百六十八）と全く拮抗している（文献⑧）のに対して、『天理本』では一対七（実数十五対百十二）であり、『狂言記』では「御座ラヌ」専用（実数四十三）である（文献⑥）。つまり、ここでは『天理本』と『狂言記』がお互いに近いと言えそうなのである。これらに対して、『祝本』は一対一・五（実数六対九）となっており、むしろ『虎明本』に近似している。

＊なぎなたハしやうとく御座ないと申（二十四オ）

＊それがしニさけをくれた事が御座らぬ（十三ウ）

次に、「オリャル」と「オヂャル」の関係であるが、『虎明本』では前者対後者が一対一（実数百八十一対百七十七、北原保雄他編『大蔵虎明本狂言集総索引』一～七によって実計）、『天理本』では一・二対一（実数五十二対四十三、文献⑨による）と、双方拮抗しているのに対し、『狂言記』では一対四（実数六十対二百四十九）となっており（文献⑦）、新形「オヂャル」が優勢である。これらに対し、『祝本』は一対三（実数二対六）となっており、用例は少ないが、『狂言記』により近いと言えそうである。

＊急程にこれじや。内ニおりやるか（三十四オ）

＊それがしがいつしやていした事がおじやるぞ（三十六ウ）

なお、これらの表現形式の否定形には「オリャラヌ」「オリナイ」「オヂャラヌ」が考えられるが、『祝本』には「オリナイ」が一例見えるだけで、他の諸本との比較はできない。

（五）待遇表現形式「オ～ヤル」「～ヤル」

これは、中世から近世にかけて、中位（後に軽位）の敬意をもつ表現として頻用されたもので、「オ～ヤル」が中世、近世初期、「～ヤル」が近世前期から中期に主として用いられた（～の部分は、動詞・助動詞の連用形）。この変遷過程については、詳細な研究は出ていないが、古狂言本については、筆者

が以前考察したことがある（文献⑩）。ここでは大部分、その繰り返しとなるが、『虎明本』では、前者と後者の割合が十一対一（実数三百十対二十八、語頭にもともと「お」を有するものは「オ～ヤル」の形が現れないので除く）、『天理本』では、六十七対一（実数二百二対三）となっており、新形「～ヤル」の比率は極めて低い。しかし『狂言記』では、ほぼ一対二・四（実数二八対六十七）で、両形の勢力は完全に逆転している。『祝本』の実態は、二・七対一（実数十六対六）で、『虎明本』『天理本』と『狂言記』の中間に位置することが明らかである。

なお、『虎明本』や『天理本』には、「～ヤル」となっている用例には、一定の傾向があるようで、特に直前に助詞の「を」がある場合になり易く（発音上の問題であろう）、次いで対者の動作に関する場合よりも、第三者の動作に関する場合が多いという事実があった。しかし、『祝本』では、

＊ここまでおじやッてもどりやるものか（十一オ）

＊あまつさへぶすをミなになしやッた（二十二オ）

などのように、これらの条件にあてはまらない用例ばかりである。また、

＊いや、先まちや（四十六オ）

の例は、命令形語尾の「れ」が脱落したもので、『狂言記』には用例があるが、『虎明本』や『天理本』には見られないものである。これらの特徴からすれば、『祝本』の実態は、内容的には『狂言記』に近いと言えそうである。

（六）原因・理由を表す「ホドニ」「ニョッテ」など

古代語において、原因・理由を表す条件表現形式は、主に接続助詞「バ」が担っていたが、中世頃からさまざまな連語による表現が発達してくる。中でも「ホドニ」と「ニョッテ」は、中世半ば以降、中心的な形式として頻用されたものである。これらの形式の変遷については、既に詳細な研究が出ており（文献⑪）、当期の狂言本でも、『虎明本』と『虎清本』（一六四六年成立）の実態が明らかにされている。ここから『虎明本』の数値を借りると、「ホドニ」は全体の形式（総数二千四百二十八）のうち七十二％（実数一千七百五十）、「ニョッテ」は十％（実数二百五十二）となっており、次いで「バ」の七％（実数百六十七）、「アイダ」の三％弱（実数六十五）、「トコロデ」の二％（実数五十三）、などとなっている。「ホドニ」と「ニョッテ」の割合は、七対一である。『天理本』の数値は未調査であるが、『狂言記』では、「ホドニ」と「ニョッテ」の割合は、ほぼ四対一（実数百九六対四十四）で、「ニョッテ」の勢力が強くなっている。これに対して『祝本』は、全体の形式（総数九十七）のうち、「ホドニ」が五十九％（実数五十七）、「アイダ」が十九％（実数十八）、「トコロデ」が十％（実数十）、「バ」が七％（実数七）、「ニョッテ」が五％（実数五）となっている。『虎明本』との比較では、「アイダ」「トコロデ」の勢力が比較的強いことが特徴である。当面の「ホドニ」

と「ニヨッテ」の割合は十一対一となっており、「ホドニ」の勢力が『虎明本』以上に強い。歴史的には中世の「ホドニ」優勢から、近世の「ニヨッテ」の伸長という流れが見られるところからすれば、『祝本』は『虎明本』よりもやや前の様相を示すと言えるかもしれない。

三

以上、『祝本』の用語を、文法的現象のいくつかに限って見てきた。この他にも検討すべき言語現象はなお多いが、ある程度は『祝本』の性格を明らかにできたと思う。『祝本』の位置を、他の諸本と比較する形でまとめると、次のようになる。

(A)『虎明本』や『天理本』よりも以前の様相を示すもの

※(三) 動詞・助動詞の命令形語尾「ヨ」と「イ」

※(六) 原因・理由を表す「ホドニ」「ニヨッテ」など

(B)『虎明本』や『天理本』に近い様相を示すもの

※(二) ラ行下二段活用とその四段化のうち、「クダサルル」「ナサルル」

(C)『虎明本』に近い様相を示すもの

※(四) 「御座アル」「御座ル」「オリャル」「オヂャル」とその否定形のうち、

「御座ナイ」「御座ラヌ」

(D)『虎明本』や『天理本』と、『狂言記』との中間的な様相を示すもの

※(二) ラ行下二段活用とその四段化のうち、「メサルル」

※(五) 待遇表現形式「オ〜ヤル」「〜ヤル」の数値

(E)『狂言記』に近い様相を示すもの

※(一) 二段活用とその一段化

※(四) 「御座アル」「御座ル」「オリャル」「オヂャル」とその否定形のうち、

「御座アル」「御座ル」

※(四) 「御座アル」「御座ル」「オリャル」「オヂャル」とその否定形のうち、

「オリャル」「オヂャル」

※(五) 待遇表現形式「オ〜ヤル」「〜ヤル」の内容

このように見てくると、『祝本』は、諸本のうちどれに近いと簡単には言えないことがわかる。考えれば、これも当然のことと言えるかもしれない。狂言の詞章は、流派や家柄によって複雑な伝承過程を持っており、また、当代の口語がどのように選ばれるかも、流派や家柄、時には個人によってもさまざまであることが考えられるからである。

ただ、右の結果から、少なくとも『祝本』のことばは、『狂言記』よりも下ることはなさそうだということは言えそうである。

しかし問題は、国語の流れの中に『祝本』のことばを置いた場合、それが『虎明本』や『天理本』より新しい言語を反映し

ている部分が多いということである。これは、『祝本』が『虎明本』や『天理本』よりも古い成立らしいということと、一見矛盾しているかの如くである。これについては、なおよく考えてみたいと思うが、一つの解釈として、『祝本』は、確かに成立そのものは『虎明本』や『天理本』より古いが、大蔵流・和泉流の正統を継ぐ宗家の狂言である『虎明本』や『天理本』が、中世以来の伝統をことばの面でも多く残しているのとは違って、より近世的な、くだけた口語を積極的に採用した結果だと考えてはいかがであろうか。つまり『祝本』は、『狂言記』について推測されているのと同じような、傍流あるいは町風の台本で、『狂言記』よりは古い本と考えてみたいのである。

ところで、『祝本』の詞章がどの流派のものに近いかは、これらの言語現象では明確なことは何も言えないのであるが、ただ一つ、注意される事柄がある。それは（四）の「御座アル」「御座ル」「オリャル」「オヂャル」とその否定形のうち、「御座ナイ」「御座ラヌ」の現れ方である。これが『虎明本』に似ていることを述べたわけであるが、これに関連して次のような興味のある事実がある。即ち、『天理本』に次ぐ和泉流の古写本として『和泉家古本』（承応〜天和頃成立）があるが、この本においては、旧形「御座ナイ」の割合がむしろ上昇している事実があり、それには大蔵流の影響が考えられるというのである（文献⑫）。つまり、十七世紀の大蔵流においては、和泉流に比較して「御座ナイ」をより好む傾向があるらしいのである。とすれば、同じく「御座ナイ」の比率がかなり高い『祝本』も、大蔵流に近い可能性が考えられるのである。最初に紹介した演劇的な内容面からの永井猛氏の推定も思い合わされて興味深いことではある。

《参照論文》

①拙稿「『祝本狂言集』の表記」（「筑紫語学研究」二、平三）
②蜂谷清人「狂言古本に見られる一段活用化の現象」（「国語学」七四、昭四三）
③小林賢次「版本狂言記における二段活用の一段化について」（「新潟大学教育学部高田分校研究紀要」二五、昭五六）
④坂梨隆三「ラ行下二段活用の四段化」（「国語と国文学」五二―一、昭五〇）
⑤拙稿「近世前期京阪語の命令形語尾『ヨ』『イ』について」（『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』所収、桜楓社、平一）
⑥大倉浩「天理本狂言六義の『ござある』」（「静岡英和女学院短期大学紀要」一九、昭六二）
⑦小林賢次「版本狂言記におけるゴザル・オリャル・オヂャルとその否定表現形式」（『近代語研究　第六集』所収、武蔵野書院、昭五五）
⑧小林賢次「『ござない』と『ござらぬ』について」（「国文学言語と文芸」七四、昭四六）

⑨小林賢次「言語資料としての天理本『狂言六義』」（『近代語研究　第八集』所収、武蔵野書院、平二）
⑩拙稿「古狂言本の待遇表現形式『オ～ヤル』と『～ヤル』」（「文献探究」二三、平一）
⑪小林千草「中世口語における原因・理由を表わす条件句」（「国語学」九四、昭四八）
⑫小林賢次「言語資料としての和泉家古本『六義』」（『近代語研究　第九集』所収、武蔵野書院、平五）

（本学文学部）